

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	原爆前の広島と原爆後の広島
Author(s)	ドゥシャン ラデリ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 16期 : 57 - 65
Issue Date	2002-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038890
Right	
Relation	



原爆前の広島と原爆後の広島

ドゥシャン・ラデリ

0. はじめに

日本に勉強するため来ることは去年8月の終わりぐらいに決まった。その通知を受け取ったときのことは忘れていない。第二希望の広島大学だった。ものすごく嬉しかったので友人や知り合いに広島へ行くこと知らせて回った。からかうような返事は予想した通りだったが、放射能など怖くないかとよく聞かれた。そう聞かれるほどに自分でも微笑んでいられなくなり、広島には放射能が全く残っていないのかどうか疑問に思い始めた。その時、ヒロシマについてあまり知らないのだと悟った。

それで、日本に来てから「ヒロシマ」を研究しようと決めた。本稿ではこちらで調べたことをまとめてみる。

1. 序論

広島は確かに世界中でよく知られた都市である。残念ながら原爆が投下されたからである。今の広島に平和公園や原爆ドームがなければ、第二次世界大戦の最後を締めくくる悲劇は思い出されにくいと思う。今、広島は人口も多く、緑のあふれた都市かもしれないが、50年前はこの都市がどうなるか誰にも分からなかった。

広島は原爆の投下によって忘れられないほど大きな影響を受けたのではないだろうか。原爆の後の広島はどうなったか、即ち広島にはどんな原爆投下の余波があったのか、それにその直接的、間接的な余波と戦った結果はどうであったかはこれまでいろいろと研究されている。

広島は原爆（ヒロシマ）に関する文献は思ったとおり多かった。しかし、見つけた本の大部分は私の研究の目標とだいぶ違った。私は地理学（物理学、医学などと違い）を専門にする者なので核爆発という現象や人体に残る原爆症ではなく、広島市という地域を研究対象として取り上げる。非常に失望したことに、この研究にとって非常に重要な、原爆が残した放射能や環境が受けた放射能の影響に関するデータはなかった。原爆資料館の展示によると、そのような情報は調査を行ったアメリカの軍の機密であり、公的にまだ公表されていない。また、五十年代は環境にほとんど興味を示さない時代だったので、そんな調査はほとんど行われなかったのかもしれない。

2. 広島が変わった日

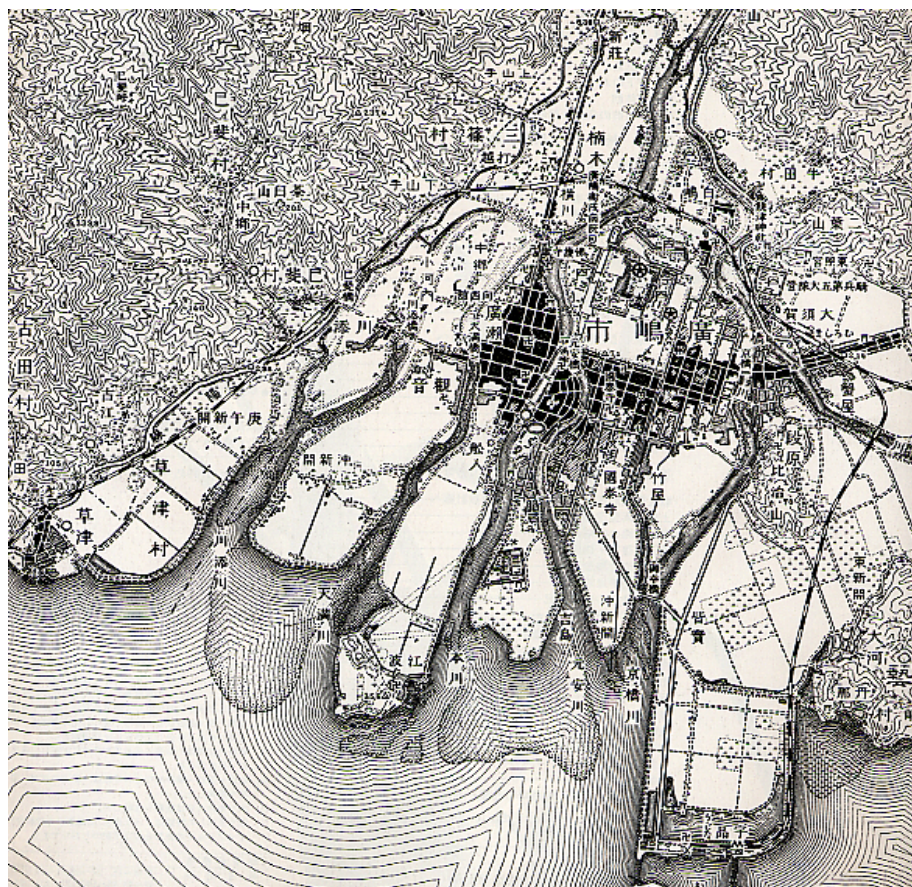
広島県の運命が変わった瞬間は昭和 20 年 8 月 6 日 8 時 15 分ごろであった。初めて投下された原子爆弾により広島市の市街中心地の大部分が灰燼に帰した。長い歴史によって造られた町並みも、そこに住んでいた人々の文化なども一瞬の内に破壊された。しかし、原爆投下前の広島はどんな町であったのだろうか。

2.1 原爆前の広島

江戸時代、広島は瀬戸内海に注ぐ太田川のデルタの上に発展した中国・四国地方最大の城下町であり、交易や流通の拠点として栄えていた。

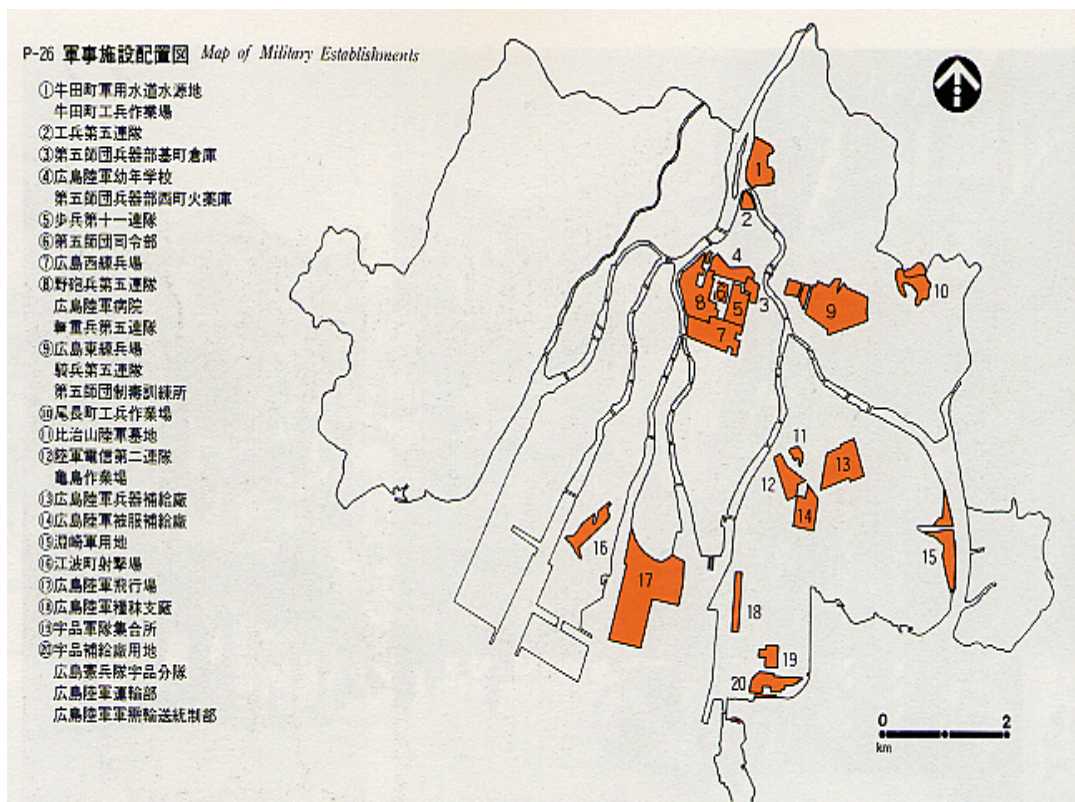
広島は明治に入ると広島県の県都になった。当時の人口は 8 万 3387 人（『中国・四国』、1998 年、2 ページ）で、全国で 8 位の都市だった。明治時代は干拓・埋め立て事業がものすごく盛んで、現代的港湾として宇品港が建設された。太田川の供給する土砂や埋め立て事業により 400 年くらいの間にデルタは大きく前進した。広島が城下町として発達し始めた 16 世紀末には、海岸線は現代の平和大通りのあたりにあったといわれる。港だけではなく、山陽本線が広島まで開通し、広島は 19 世紀末には近代的な経済発展のために不可欠な交通網ができた。

地図 1：地図で見る 1898 年の広島（『広島被爆 40 年史』、1985 年より）



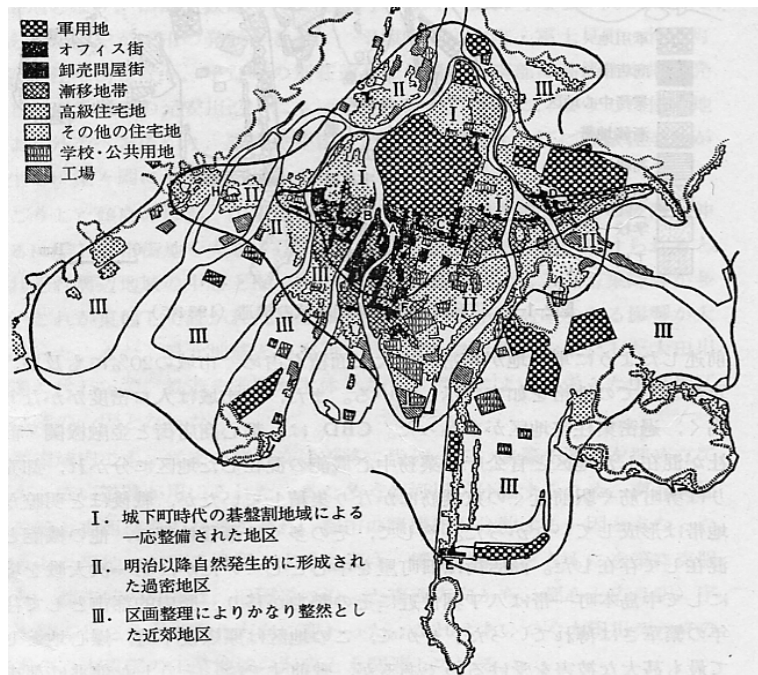
しかし、広島は産業（特に工業）の発展により軍都として発展することになった。広島駅と宇品港はまず日清戦争の軍関係の輸送基地としての役割を担った。その結果、町の中心部には軍事施設が作られた。広島と軍との関わりはずっと切れることがなかった。明治時代に兵器工業などが集められたが、昭和になると自動車生産（東洋工業）や造船（三菱重工）により重工業化が進んだ。

図1：軍都広島（『広島被爆40年史』、1985年、20頁より）



大正、昭和の時代には、軍都としてだけではなく、文教都市としてもよく発展した。高等学校が多く、広島文理大学も作られる（1929年設置）ほど先進的な都市であった。

図2：1934年の広島市の都市構造（『広島新史、地理編』、1983年、86頁より）



しかし、すべてのものが前向きだったわけではなかった。特に、第二次世界大戦が終局に向かうと、広島に住む人たちの生活も難しくなった。戦争が長期化し、国民は総動員された。高校生から小学生が動員され、軍で使う兵器を作らされたり、軍事教練をさせられていたのがその一例である。ほとんどすべての物資が配給制になった。取り分け食料は不足し、人々は窮乏生活に耐えていた。

とは言え、広島市は拡大し、原爆投下の前には約35万人が住む都市であった（『中国・四国』、1999年、8頁）。『広島被爆40年史』（43頁）によると、1942年には41万9千人だったが、学童疎開や建物疎開、兵役などで激減して、1945年8月には245423人となったようだ。しかし、この数字は前の典拠とだいぶ違う。

（『中国・四国』、1999年；『広島原爆被害の概要』、1998年；『広島被爆40年史』、1985年より）

広島軍都としての歴史を見れば、なぜ広島が原爆の目標に選ばれたかよく分かる。

しかし、原爆投下の目標に選ばれた理由はもっと複雑である。目標は沢田によると（1999、35頁）、1. 直径3マイル以上の大きな都市で目立つ目標があること、2. 爆風で効果的に被害を与えられること、3. 8月まで攻撃されずに残りそうなこと、を基準として選定することになったそうだ。目標となる都市は数回変更されたが、最終的に京都、広島、小倉、新潟が選ばれた。

即ち、原爆は戦争を終わらせるためではなく、“研究”（マンハッタン計画を実行する）

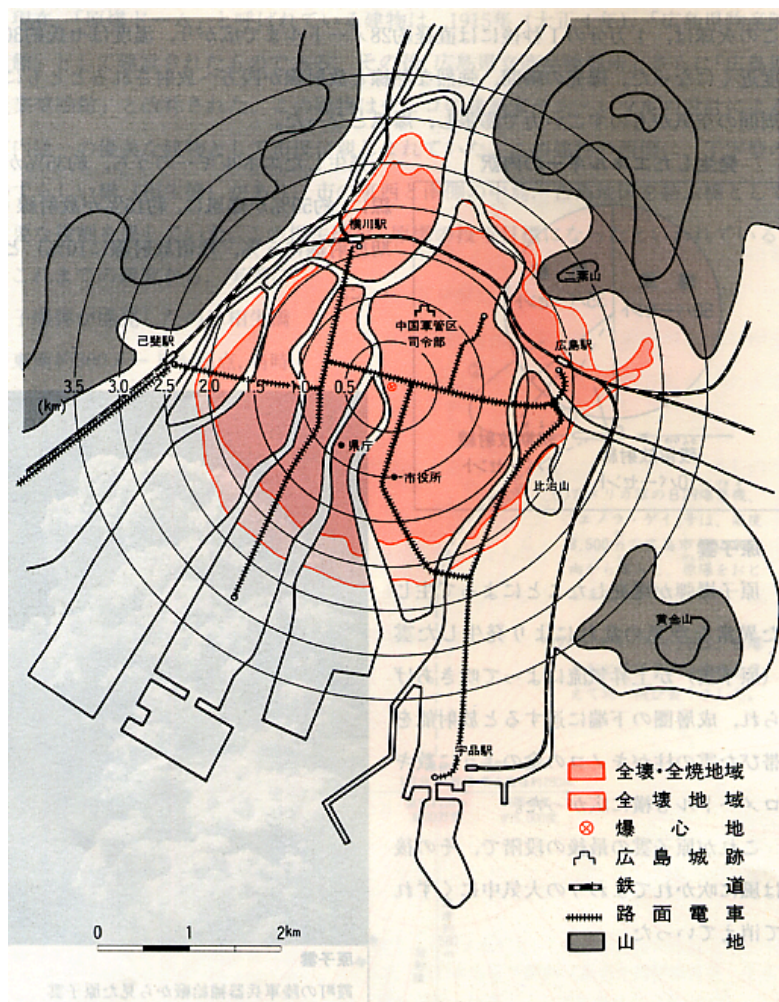
のために投下されたようだ。

3. 原爆の影響

原子爆弾の影響は二つの種類に分けられる。一つは爆弾の直接的な影響であり、結果はすぐ出るので、比較的測定しやすい。例外となるようなことがあってはおかしく、下の図に示された区域は爆弾の直接的な被害を受けた。

間接的な影響は地域的にも時間的にも測定しにくく、公的に行われた調査が少ないので、影響の広がりや推測するしかないだろう。

図3：被害区域図（『広島原爆被害の概要』、199812 頁より）



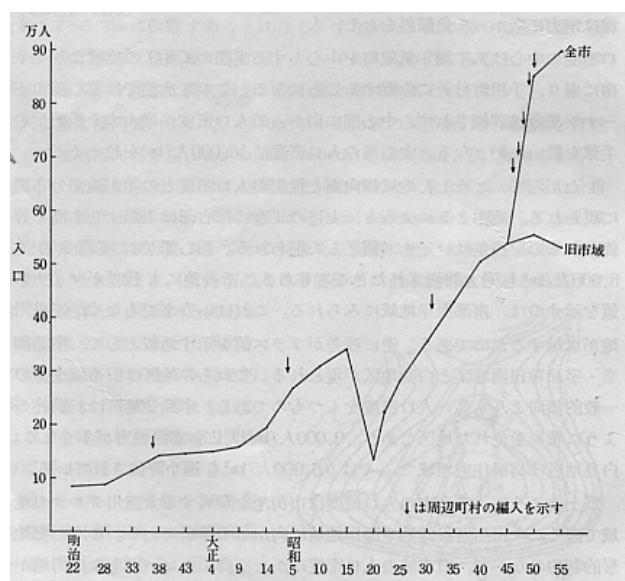
3.1 直接的な影響

直接的な被害は、また死傷者と物質的な損害とに分けられる。その二つに関する文献は非常に多いが、最も完全で詳しいのは『広島・長崎の原爆災害』であろう。

図3を見ると、通常の（大部分が木造の）建物は、爆心地から1.5-2.0kmの区域までが全壊全焼、2-3kmの区域が半壊半焼であったと分かる。爆風と火災によって灰燼に帰した総面積は約13平方キロであった（『広島・長崎の原爆災害』、1982年、25頁）。

広島の人口は、原子爆弾の熱線、爆風、また直接浴びた放射線ではほぼ半分ぐらいになった。1976年に広島市がまとめた国連事務総長への報告では、被爆による1945年末までの総死亡者数を140000人（+/-10000人）と推定している（『広島・長崎の原爆災害』、1982年、65頁）。

図4：広島市の人口移動（『広島新史、地理編』、1983年、30頁より）



なぜ死傷者の数がそれほど多かったのだろうか。原爆の爆発力だけではない。原爆投下の45分ぐらい前に空襲警報が解除され、ほとんどの人が防空壕を出て、直接爆発にさらされることになったからである。一例であるが、そのとき建物の解体作業に動員されていた約8300人の学生のうち、約6300人が死亡した（『広島被害40史』、1985、25頁）。

3.2 間接的な影響

このタイプの（被害と認められる）影響はもっと評価しにくいだろう。だから、関係した文献は少ないが、影響があまりないという意味ではまったくない。放射線は生物（人間）にも環境にも影響を与えた。環境に対する影響で報告されたものは、爆発の一時間後ぐらいに降り始めて30kmほど広がった“黒い雨”だけだ。

人間に対する影響のほうはかなり注目された。肉体には、長期にわたっても様々な障害が起こった。ケロイド、白血病、ガン、胎内被曝、遺伝的障害が放射能の影響として記録された（『広島原爆被害の概要』、1998年、23-24頁）。

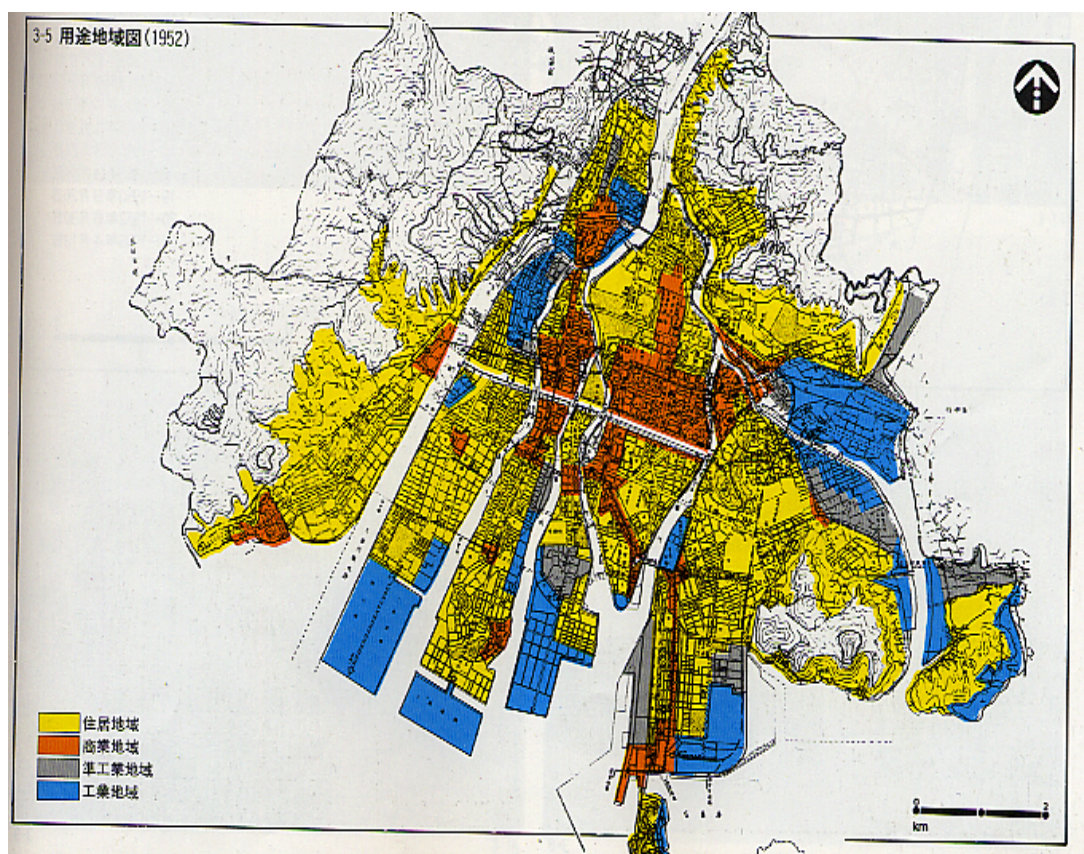
しかし、徹底的に破壊された広島市の人々は、これほどの被害を受けたにもかかわらず、力を合わせ、信じられなほど素早く町の復興につとめた。

4. 町の復興

広島復興の計画は原爆のすぐ後始まった。行政当局からだけでなく、民間からも様々な内容の豊かな構想が次々に提案された。広島をどこか別の土地に移動して建設しようという考え方も一度ならず提案された（『広島被爆40年史』、1985年、44頁）。

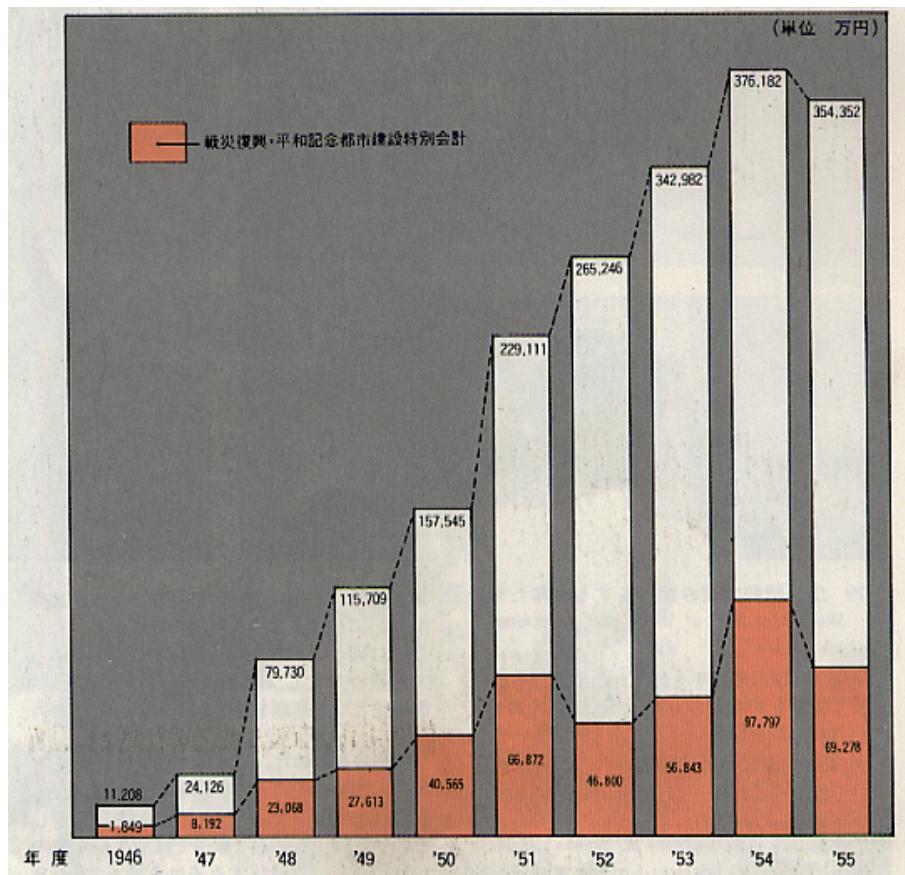
復興がどう進んだかは写真の多い『広島被爆40年史』を見ればよく分かる。広島の復興は被災地の整地事業で始まり、広島の町並みは原爆の前の交通網をだいたいそのままに合わせて次第に新しくなった。人々が信じられないほど早く広島に帰ってきたため、人口も急激に増大した（図4）。

図5：土地利用、1952年（『広島被爆40年史』、1985年、63頁）



1949年には「広島平和記念都市建設法」が公布され、道路や公園の計画的整備により今日につながる都市構造の骨格が造られた（図5）。図6を見れば、戦災復興費だけではなく、歳入が10年間で30倍くらいに増大していることが分かる。

図6：歳入決算（『広島被爆40年史』、1985年、57頁）



1960年頃、戦災復興事業はほとんど終了したが、広島市を大きく発展させる高度経済成長期が始まる。軍都から残された技術や施設をベースに、造船や自動車生産などの機械工業が急速な発展を見せた。人口は、絶えず増加し、現在（1999年）の約112万人となった。

70年代から広島は、環境汚染や国際化という特別なことではない問題に直面している。1998年には世界的な平和研究機関の建設を目指した。しかし、21世紀に世界都市として発展していくには、こうした対応だけでは十分ではないだろう。結論として完全に同意できる岡橋の感想で終えよう。「…広島は、山と海の間の人、モノ、文化の交流の中で地方色豊かな都市として発展してきた。その意味で、今こそ原爆によって失われた土地や街の記憶を取り戻す時期ではないだろうか。…個性的で美しい街こそ、世界都市として国際的な交流の地になり、そして真の国際平和に貢献するはずである。」（中国・四国、1999年、8頁）

5. おわりに

広島市内を散歩すると、魅力のある現代的な都市が見られる。しかし、原爆資料館の展示を見ると広島を新たな目で見えるようになる。最近、真夏のある日、散歩をしていて、「平

和の道」沿いの枯れた木を見つめた。数本の木の葉っぱが枯れていた。今年の夏のひどい暑さのせいなのか別に原因があったのかは決して分からないだろう。

広島は昔からずっと繁栄した町である。第二次世界大戦の戦災も現在の広島の繁栄に深く関わっている。条件が最悪のとき復興することは最も難しい。広島は原爆の後75年は草木が生えないという噂もあって、楽観できる時代はなかった。広島の復興を調べている、社会経済的な側面は非常に面白いと思う。人々は活力をどこから与えられたのだろうか。

これから広島はどうか。他の進歩している日本の主要都市と比べれば平和都市、広島順位は下がっているかもしれない。平和都市、広島と言っても、過去を思い返す原爆資料館と一年一度、平和を祈る人々でいっぱいになる平和公園くらいしか意味を持たなくなるだろう。

ヒロシマを作った神話があるが、ヒロシマには作られた神話もある。今こそ未来に向かう時代ではないだろうか。

参考文献

広島被爆40年史、都市の復興 1985年、広島市企画調整局文化担当、135頁。

広島原爆被害の概要 1998年、広島平和記念資料館、32頁。

中国・四国、地図で読む百年 1999年、古今書院、181頁。

広島・長崎の原爆災害 第8刷発行 1982年（第1刷発行：1979年）、岩波書店、504頁。

沢田昭二：広島・長崎原爆被害の実相 1999年、新日本出版社、258頁。

広島新史。都市文化編 1983年、広島市、533頁。

広島新史。地理編 1983年、広島市、923頁。

戦災復興事業誌 1995年、広島市、393頁。